

---

# アマツ風に吹かれて

笠野 芭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アマツ風に吹かれて

### 【Nコード】

N6191C

### 【作者名】

笠野芭

### 【あらすじ】

時勢に沿った様相に変わりつつある京都の初秋。京都文教女子短期大学の附属高等部二年に在籍する美穹乃は、中二の晩夏に失踪した幼馴染み、励と再会する。美穹乃の想い出の中では、明るく快活で心優しい少年であった励。しかし、三年間もの月日を跨いで再会した幼馴染みは、まるで別人になったかのように豹変していた・・・。

関わった人間を必ず不幸に陥れる天の吐息 『アマツ風』を追って、励は自らに課した責務を果たそうとする。変わりゆく古の街と、変わってしまった大切な人。美穹乃は不幸を招く風を鎮めるた

め、失われてゆく形を忘れぬよう、人々の運命が錯綜する十字路を  
駆ける。

## プロローグ

「風は、何処から来ると思う？」

男の問いに、姿なき者が応えた。それは、笛の音色に似た鳴き声でさえずりながら、気圧の低い方へ緩やかに流れてゆく。

無抵抗にはためいた白衣が、男の垂れた腕にまわりつく。男は払おうともせず、屋上へ到る唯一の進入経路である金属の戸へ視線を移す。

「誰だ？」

白衣の男は、生徒用に加工していない言葉を音声に変換した。

風が撫でる髪に隠された瞳孔は、先駆的なデザインの眼鏡に乱反射した陽光へ鋭敏に対応して、縮む。

「須賀先生。私です」

籠った声はそう予告し、続くように、鉄が擦れる音と共に小さな女学生ためらいがちに顔を覗かせる。

「……君か」

白衣の男 すが いおり 須賀庵理は、言つて前髪を手で払い。

「今日の講習は終わったはずだが。何か、質問か？」  
滑らかに句を継いだ。

「私が須賀先生に今日したい質問は、講座の後ので全部です」  
受け答えしつつ、背に回した手で進入経路を塞いだ女学生は、頬

に流れる黒髪の末端を両手でこめかみに留めた。

大学生にしては華奢で小さ過ぎる体軀は、今は気にならない。

「疑問の捌け口として先生を選んでくれたのは光栄だ。けど、『今日したい質問』は済んだのだろう？　これ以上、先生は君の期待には応えられないと思うが」

「はい。仰りたいことは良く分かります。ただ……」

「ただ？」

言い憚る女学生に、須賀は声と目で促す。

女学生は風で暴れる髪を両手で鎮め、

「私は、須賀先生の研究なさっていることに興味があるんです！」  
しっかりと発言した。

「……どこまで知っている？」

目を細め、白衣に両手を収めた須賀は、重ねて質す。どの範囲まで把促しているんだ？　と。

「今朝……」

女学生は、無垢な黒い瞳を須賀に示し、

「同級の早乙女さんの両親が事故で亡くなりました。それに、何らかの形で須賀先生が関わっている。」

「……私、分かります」

言って、一歩ずつ須賀との距離を縮めてゆく。

呆れたように深く息を吐いた須賀は、風が強いなと笑いながら視線を虚空にさまよわせ、速まる鼓動を律した。

落ち着いたところで、適度な距離で歩みを止めた女学生へ顔を遣り、

「根拠は？ あるんだろうね。楽しみだ」

「ありません」

須賀の掛けた鎌に即答する女学生。

「……ない？」

露骨に、須賀は拍子抜けした素振りを見せた。演技だ。

女学生は、相対して真摯な口振りで、

「ただ、証人はいます」

「証人？」

須賀は鼻で笑った後、

「君は突飛な嘘を考えるね」

「嘘じゃありません！」

微笑を浮かべる須賀は言葉を被せるように、

「じゃあ、連れてきてくれないか。その証人を」  
追い討ち。

「……………」

しばらく、沈黙が時間の経過をつやむやにする。

風のさえずりのみが場を占有し、天から射す陽光が京都大学の屋上に陰を作る。

「証人なら、ここにいます」

青臭い声は、金属の戸から聴こえた。

素早く視線を飛ばし、沈着としたまま動じない須賀をよそに、「ど、どうして！」「信じられないっ」と。なぜか混乱しているのは女学生の方だった。

（パフォーマンスか？）

平常心を屋上から落としてしまったかのように狼狽<sup>ろうばい</sup>する女学生を横目で観察しながら、須賀は憶測を巡らす。

（  にしては、冗談が過ぎる）

唯一の出入り口に向かつて一歩、須賀が踏み出した刹那。金属の戸が重量感のある音をたてた。

人物を認識した須賀の表情が一瞬にして曇り、

凍る。

「生きて……いたのか？」

「ああ、風には見放されたけどな」

戯けた調子は声色にも表れず、少年はあっさり不可解な言葉を口にした。

眩しそくに彼方を眺める横顔は、暢<sup>のんき</sup>気に半身が向く方位に帰ってきた。同時に、逆光の覆面は遙か上空に漂泊する雲の気まぐれに従い、少年の顔面から剥がされる。

学問に従事する者が集う施設とは不釣り合いな面持ちが

そこにあつた。

## プロローグ（後書き）

叙情的に綴られる短いロマン（小説）です。

構成なしの放任執筆ですが、内容には一切手を抜くつもりはありませんので、物語の帰着まで成るように成るであらうと考えても大丈夫です。現在、掛け持ちしているタイトル（作品）についても、成るように成ります。大丈夫です。解釈としては、あっちはドラマでこっちはシネマでしょうか。更新の頻度は、「慣れ」次第です。



## 第一話 告げる風

「1」

小学校の先生になるのが夢だった。

先生の存在を『教師』と認識できるようになった今でも、それは変わらない。夢としての形は変わらない。

でも、揺らいでいるのは確かだ。

永劫の憶分の一にも満たない夏休みを終え、早、三週間が経過する。

高校生活を重ねるたびにその退屈さを肥大化させる授業を曖昧に聞き流し、旭川美穹乃あさひかわ みそのは近頃の自分を誰にともなく実況中継していた。無名のアナウンサーによる音声のない中継が、果たして放送局と繋がっているかどうかは、暗黙の常識から推定するしかない。

旭川美穹乃。十六歳。

小学校の国語の教師である母が考案した名前は、美しい空の汝なんじという意味らしい。最近、初対面の相手に挨拶をした後の第一声が名前に関する感想からだど、分かってきた。

古い人種である父は、愛娘に淑やかな京都美人に育ってほしいと願っているっぽく、小から大と連なる女子一貫校へ半ば強引に押し込めた。美穹乃が小学校の教師を目標に定めているという周知の既成事実も兼ね、晴れて文教女子短期大学の附属の下に美穹乃の将来は委ねられたのだった。

他意はない。反発もなかった。

同性なお陰で隔たりなく親しめる女友達も、沢山できた。ここま  
で育ててくれた両親にも感謝している。いつか、親孝行をしたいと  
も思っている。

ただ

何か足りない。欠落している。最近は特に、そんな虚無感にか  
られる時間が多くなってきた気がする。

今も、そう。

「ねえ。あの先生さ、カッコ良くない？」

「暗黙の了解でしょ。そのくらい」

「ウソ?! まさか志帆っちも狙ってるの？」

「さあ、どうかなー」

通路を挟んで隣接する席から、女子特有のひそひそ話が繰り広げ  
られている。

系列の校舎に男子生徒はいない。この程度、日常茶飯事の域だ。

(あゝああ。心底やる気なくす)

倦怠感の過密する顎を両手の平で支え心中で愚痴た美穹<sup>みきゅう</sup>は、窓  
際の席であることを最大限に利用し、初秋にして色気づく早熟な紅<sup>も</sup>  
葉をぼんやり眺める。年齢の層で分けられた校舎には、京都を象徴  
させる秋の色が鏤められていた。

四階からなら眼球を働かせなくとも位置を確認できる体育館では、  
どうやら大学生の先輩がバレーを演習しているようだ。声が、男子  
並に太い。

うつすらと、最近テレビで放送されたホラー映画の断末魔の叫び  
を彷彿した。惨劇と化した体育館を想像して気持ち悪くなった美穹  
は、周囲に悟られぬよう自然な動作で自分の肩を抱く。

学校の敷地<sup>かいち</sup>から外、界限<sup>かいがい</sup>には、年期の入った寺院が多数点在して

いる。

伽藍へと続く参道に負けないくらい車道も通ってはいるが、車を乗り回すのはもっぱら観光客。まさか、舞子と呼ばれる芸者が着物姿で車を操っているなんてことはない。どこその都道府県が源泉の根も葉もない迷信だ。観光のパンフレットを妄信する無知な外国人でも、そんな冗談を信じたりはしないだろう。

生徒の大半が待ち詫びていたチャイムが校舎に響き、「起立！」  
「礼！」と続く律儀な形式に、教室を占める二十数名全員が従った。  
午後の授業は閉幕。

水を得た魚のごとく加減なき音量で談笑する大多数を尻目に、一人の生徒が規則的かつ無駄のない迅速な所作で、帰り支度を始めていた。

美穹乃は終始夢中で話す友人を手で制して、鞆を抱いたまま教室を去ろうとする彼女を追う。

「喻樹。今日も、塾？」

廊下まで駆けた美穹乃はいつもの声色で、早乙女喻樹を引き止めた。

「葬式。親、死んじゃったから……」

背を向けたまま、喻樹は事情だけを口にした。

（へ……何、まさかジョーク？ 喻樹が？）

「ホント？ いつ？」

「今朝」

言って、ようやく美穹乃の方へ首を回す。明らかになった表情は、無の膜を張っていた。

「だって、普通に受けてたじゃん。授業」

喩樹はいつも大人しく席に座っているような、物静かな子だ。本  
人いわく、自分は根暗で無愛想。美穹乃は否定しなかった。否、で  
きなかった。漢字を読めなかった頃から喩樹を知っている、  
美穹乃だからこそ。

「……美穹乃には無関係でしょ。私の両親がどうなろうと」  
後頭部の髪を軽く留めてできた尾を揺らし、喩樹は進むべき通路  
へ視線を戻した。

まだ、生徒の影はない。

「あたしにだってカンケーある！」  
美穹乃は考えなしに、喩樹の主張を否定した。あの時はできなか  
った否定を。

二、三步のところで歩行を中断した喩樹は、勢いよく振り向き  
「別に困らないでしょ？ 美穹乃は」  
皮肉をぶつけた。

「困らない……けど」  
喩樹の強い弁舌に言い淀む美穹乃は、俯く。  
隙を見計らって、喩樹は速足で行ってしまった。美穹乃は追おう  
とした。

けど

「美術館廃止になるって、今のうち観に行こうよ」  
「うん。行こう」  
隣の教室から後輩の生徒が飛び出してきた。  
面喰らった美穹乃は、しばらく茫然と立ち尽くすことを選ぶ。

（あたし……、バカだ）

〔2〕

京都の風情から乖背した近代的な市街は、学校を出て西へ、小川一本越せば見えてくる。

旭川家、つまり美穹乃の住まいが地理的に位置するのは、ちょうど京都市中心街と京都大学の間だろうか。京大医学部の管轄である附属病院も、当然、近くにある。何かあったときには好都合だ。

美穹乃は何気に勘繰る。何かとは何なのだろう？ 病気？ それとも事故？

そんなこと、自分には無縁に思えた。否、そう思っていたのが人の性分なのだ。美穹乃が特別、樂觀的な訳ではない。

不意に空を仰げば、あたかも王城のように街路の中枢に鎮座するデパートが、施錠を忘れた美穹乃の視界を陣取る。

京都は変わった。

美穹乃の周囲にいる大人は、そればっかだ。何が変わったのだろう？ 単純に風景？ 町か街？ あるいは人？

かつて団塊と称されていた世代の間で謳われている『昔の京都』を知らない美穹乃には、想定できる変化に具体性を求めることはできなかった。

ついさつき経験した苦汁をしきりに頭を働かせることで誤魔化しながら、美穹乃は佯びしい歩道を行く。夕暮れが近づくに連れ、人の往来は逡増する一方に傾いていた。

気鬱から俯きぎみに歩いていた美穹乃は、濡れた雑巾を壁に打ちつけたかのような音にびくと反応し、それに続いた短い悲鳴に、無意識に顔を上げた。

幾重にも交錯する車道が敷かれた大通りで、その光景は展開して

いた。

「ウソ？ 事故……？」 呟いた美穹乃が視線を送る先には、動物っぽい何かの死骸。否、まだ死んではないかもしれない。

大通りの中心から立ち込めるのは

不快感と、

風が散らす臭気。

「やだ……、猫？」

「やけに大きいな。野良猫のボスか？」

悲鳴のした方向とは別の位置から、大学生のカップルらしき二人組が目先の情報を垂れ流した。

（なんか不吉……。事故つたの猫なんだ）

確かめるのは野暮だ。美穹乃は踵を反し、全力で走ってこの空気から逃げようとした。

一刻も早く

「つて……、あららあぁ？！！」

刹那に吹いた強風に背を押され、美穹乃は対応しきれず下半身を礎にした均衡を崩し

前屈みにずっこけた。

「痛った……。誰？ 押したの」

愚痴りながら身を起こして、美穹乃は転倒した位置を顧みる。

「へ……………」

誰一人いなかった。影も形も。

美穹乃は性急に辺りを見渡したが、はり命あるモノの姿は見受けられない。

「これって……、どゆこと？」

不安を紛らわすため呟いた美穹乃は、痺れの発信源であろう両肘

の擦り傷を確認する。いくつか痕があった。気づけば、露出した脚にも数箇所できていた。

「もう、最っ低い……」

美穹乃は溜め息まじりに愚痴た後、脇道から覗く小川の脈に沿って、片足を微妙に引き擦りながら駆け出した。この路地は、たまにしか利用しない自宅への近道だった……。

「3」

「患者が消えた!？」

「はい。すべての病棟を捜したんですが……」

控えめに陽光が射し込む院長室で頭を下げるのは、看護師として常勤する京大医学部の男子学生。

用件は、担当する患者の失踪。

「いつだ？」

「はい？」

分からないといった様子で直立する見習い看護師に、五十の台に乗ったばかりの院長は、

「私は君にいつだと訊いてるんだ! 患者がいなくなったのは、いつだ?」

声を荒げた。

「は、はい。一時間半前です」

直立不動はそのまま、青年は質問に答えた。

「一時間半? その間、君は何をやっていたんだね」

質す院長に、青年は姿勢の水準を一段階上げ、

「はい。さきに言った通り、患者を捜していました」

「報告は？」

「はい。今が、最初で最後です」

椅子の肘掛けに腕を置く院長をしかと見据えながら、青年は発言する。

「不要な混乱を避けるため、他の看護師や医師には話していません」

「馬鹿者！！」

怒号が被さる。

「先にすべきは上への報告だろうが！ 君は、脳系統の神経に何か欠陥があるのかね？ 話は終わりだ。とつと私の前から失せろ」

「あぁっ、はい！ 失礼しました」

大学病院の全責任を負っている院長の剣幕に圧倒され、青年はパニくりながら部屋を退こうとするも

「待たんか！」

怒声が跳ねた。

青年は恐る恐る背後を窺って、

「何でしょうか？」

尋ねてみた。

椅子にもたれる院長は、概観して表情からは憤怒が読み取れない。

「名前」

「はい？」

すっとぼける青年に、院長は立場という蓑に潜<sup>みの</sup>らせた憤慨を露にして、



「消えた患者の名義だ！！」 怒鳴った。

「……はあ、それが」

青年は堪らず院長から目を逸らして、

「調べても、住民登録されていなかった名義でして……」

声色を落とす。

「いいから、さっさと教えろ」

組んだ腕を解き、苛立った口調で促す院長。自信なさげに、青年は院長のそれに視線を寄越し、

「十六、七の少年なんですが、千歳励ちとせれいと名乗りまして。女っぽい名前ですし……、変じゃないですか？」

偽名ではないか、と共感を誘う青年。院長は椅子を回すことで、それを視界から外した。

千歳励。

おそらく、いや確実に院長は聞き覚えがある。ただならぬ横顔からそう察した青年。沓掛幹秀くつかけ みきひでは、音をたてぬよう細心の注意を払いつつ、部屋を後にした。

～4～

美穹乃が自宅に帰ってからまず最初に行ったのは、傷口の洗浄。シャワー備え付きの浴槽ではなく、台所に乗り上がって処置をした。踏み台にしたのは付近の椅子。母が、棚の高い位置に収納されている食器を取り出すときに用いる奴だ。次に、救急箱の搜索。これは、意外にもすぐに見つけた。数珠つなぎの絆創膏を三つほどちぎり、一時は肘と膝の痕を塞いだものの、「みつともない」と嘆いた美穹乃は、貼ったばかりの絆創膏をすぐに剥がしてしまった。

その後、迷わず自分専用の部屋に向かった美穹乃は、コンクリの塗装で汚れた制服をベッドに投げ捨て、タンスから引っ張り出してきたカジュアルな上下をなるたけ急いで着た。意図的につけられた傷のないデニムのズボンを書くのは、すこぶる久々だった。若干、サイズが厳しかったが、「女の子はこれくらいがベストでしょ」との一言により、最近ちよつとだけ太くなった自分の脚を美穹乃は肯定することにした。肘の痕は、シャツの上に重ね着した丈のあるジャケットで隠蔽。

「うし！ あたし完璧」

等身大の旭川美穹乃を映す鏡に『Good』をキメた美穹乃は、鞆から探し当てた財布をズボンに突っ込んで、寝転がってくつろぎたい衝動を誘発するマイルームから脱出した。

（喻樹の言つてたことがほんとなら。葬儀、行かなきゃ）

幼馴染みとして……。

〔5〕

京大総合人間学部の助教授である須賀庵理は、与えられた自室のデスクに腰掛け、個人のサーバーに宛てられたメールを読んでいた。他県の大学への出張に関する予定を主に、修士過程を控えた学生からの論文絡みの依頼など。別段、返信に急を要する訳ではない。助教授に昇進して三年も経つ須賀には、さして意識せずとも記憶に刷り込むことは可能だ。

対して、数十分前から須賀の明晰な頭脳を支配する“研究対象”に関連した事柄は、メールに乗せられた些細な事項とは比較にならない。

助教授就任。おめでとさん。

パソコンに展開するウィンドウを眺めながら、須賀は数十分前の会話を反芻していた。

千歳か？ 生きていたんだな。

見りや分かんذار。それとも、あんたの眼にや穴あいてんのか？

三年間、なぜ失踪を演じていた？

いいのか？ お抱えの生徒さんが聞いているぜ。

すっかりぬるくなったコーヒーを喉に通した須賀は、目頭を押さえるながら椅子に躰を癒着する。

ドアを連続して叩く音の後、

「須賀先生。お邪魔してもいいですか？」

理知的でいて、どこか愛らしさの残る声が、ドア越しに聴こえた。

「君の判断に任せる」

目頭から指を離れた須賀は、大きめな声で煽った。

「はい。では……」

言ったのちドアを引いて、

「失礼します」

小さな女学生が、決して立派ではない体躯を晒す。

須賀の記憶では、名前は篠塚<sup>しのづか</sup>彌生<sup>やよい</sup>。須賀の指導する三年生だが、実質上の学力は修士過程のみならず、博士過程の学生にすら匹敵する水準だろう。といっても、指導教官である須賀の評価だが……。

「先程の件か？」

冷めたコーヒーを捨てに立った須賀が、彌生の顔を見ずに言った。  
「ええ、先生の口から話してもらわないと、気が気じゃありません」  
大袈裟な、と須賀が振り返り表情を窺うと、彌生は真摯な眼差しを返してきた。

「あの少年は、須賀先生の何なんですか？」

「その前に」

投げかけられた質問には応じず、須賀は茶色い液体を台所に流しながら、

「君が彼と知り合った経緯<sup>いきわづ</sup>を、話してもらおうか」  
言って、顔だけ彌生へ寄越した。

「……そうですね。それが道理です」

ドアを背に立ち尽くす彌生に、コン口でお湯を沸かし始めた須賀は冷静な口調で、

「座つたらどうだ。コーヒーもすぐに煎れる」

論文を提出しに訪ねて来る学生用の椅子を勧めた。

「あ、私がコーヒー煎れようと思ったんですが……。まあ、いいです。今回は見逃しましょう」

須賀の行動に目をつむつたらしい彌生は、引いた椅子にちょこんと腰を落とし、軽やかなスカートを臀部の下に片手でするりと通した。

（コーヒーを煎れようとした？　ここは、僕の自室なんだが……）

京都で亡くなった者の葬儀は、大抵、命日であるその日か翌日までに執り行われる。

京都市には寺院が広く遍在しているが、その中でも正式な修行を経た住職が管理している伽藍は、意外に少ないのだ。予約した『客』が他に移るといったケースも珍しくない。人の訃報が電波を飛び交うことで儲かる営利商売である以上、競る心理が働くのも否めない。複雑な感情をない混ぜにした美穹乃は、軽度に錆びたオンボロ自転車をあちこち転がしていた。携帯電話を介しての喩樹との音信が途絶えた今、美穹乃は勘を頼りに寺院を巡るしかなかった。

確か、喩樹には大学生の姉がいる。

めばしい寺院をいくつか潰したあたりで思い出した美穹乃は、着信履歴には出現することのない名前をカテゴリーから探した。

「……あつたあつた」

自転車のサドルに股がったまま、美穹乃は小さな感動を覚えた。現在の座標は東山区から少しはみ出した辺り、圏外はずがなく、電話はすんなり通じた。短く、互いが本人であることを承知し合う。美穹乃は自転車を電柱の側に停め、重たい話題を切り出す。

「あの……突然ですが、早乙女さんのご両親がお亡くなりになられたって、ホントですか？」

「そう、喩樹から聞いたのね……。本当よ。迷惑な話よね」  
どこか冷たいようで温かい、落ち着いた声が返ってきた。

「葬儀、今日なんですよね？ 場所はどこですか？ あたしもお線香ぐらいは……。出席とまでは、いきませんが」  
早乙女夫妻と直接的な親交があった訳ではない。それでも、友達である喩樹の両親なのだ。亡くなったというのなら友達として、しらんぷりはできない。

「浄泉寺。市役所の近くよ」

「えっと……、浄泉寺ですね。あたし、行ったことがあります」

美穹乃の座標からはやや距離がある。そこに辿り着くには、あの鴨川を越えなければならない。

「それより、葬儀が今日だって……驚いた？」

「え？」

「私の要望なの。できるだけ早い方が良いつてお願いしたら、親戚で就職をやっているおじさんが『命日である今日が良い』って言うものだから……」

（お姉さん。何を言い出すんだらう……？）

両親が逝ってしまったというのに、死を認めないどころか自ら現実味をそそっているのだ。

美穹乃には、信じられなかった。

「いやいや、そんなのフツーですよ。嫌なことは、早く済ましちゃった方が楽ですから」

例外はある。この場合、冥土に旅立つ仏様に対して薄情ではないか？

他人の失言をフォロー。

美穹乃にとって、それは十八番オハコのようなものだった。

推定される到着時間もろもろを伝えた後、美穹乃は自分から通話を切った。

肺に吸い込んだ二酸化炭素を目一杯まで吐いた美穹乃は、傍らの電柱に思いつき背を預け、憎いほど蒼々とした無言の空を仰ぐ。

（遺された人は、皆すぐに忘れようとするんだ……）

朝、普段と変わらぬ様子で挨拶を交した喩樹も、両親をともらう儀式を後始末のように話す喩樹の姉も。

そして……、

世界で一番大切な存在だった幼馴染みがなくなったとき、躍起になって忘れようとした

自分も。

「フ」

「亡くなっただって……本当だったんだ」

信じていなかったわけではないが、実際に葬儀独特の重たい空気を吸ったとき、美穹乃は無意識に呟いてしまった。幸い、至近に人はいなかったなので睨まれることはなかった。

（これから、焼いて骨にしちゃうんだ……）

砂利の敷かれた参道に停まっている霊柩車の周囲には、五十人以上の老若男女が群がっていた。比較的、黒を基調とした重苦しい衣服が目につくが、中には仕事場から直行したらしい大工か職人風の中年や、艶やかな和服姿の芸者まで混じっていた。さすがに、大工は職業道具を手には握ってないし、芸者は化粧で顔を白くはしてなかった。

何をすれば良いのか分からず、しばらく美穹乃は立ち尽くしていると、

「来たんだ……」

背後から、声を掛けられた。

「喩樹?!」

制服のままの喩樹が、無表情で立っていた。喩樹は人影のない砂

利道を歩きながら、

「驚いてんの？ 居て当然でしょ、親の葬式なんだから……」

一度、顔を霊柩車の方へ向け、

「ほら、泣いてる人いないし。もう終わるよ」

淡々と話した。

砂利がこすれる音。

去ろうとする喻樹の腕を掴んだ美穹乃は、足許に敷き詰められた砂利のように収まりなく散らかる感情を抑えきれず、

「もっと素直になりなよ！ 悲しいなら……もっと、悲しそうに振る舞ったら？ それじゃあ、周りが分かんないじゃん。ちゃんと優しくできないじゃん!!」

言いたいことを言った。

友人の性格を感情的に咎めた美穹乃に、後頭部を向けたままの喻樹はさらりと言い放つ。

「へえ……、美穹乃は同情したい人なんだ。ごめん、私はパス」

「そんな、言い方って……」

砂利が激しく喧嘩する音。

「ちよつ、パスってどーゆー意味か解らないじゃん。待ちなよ。喻樹！」

無視して喻樹は、境内から駆けて出て行ってしまった。

呼び止められなかった美穹乃は、背に突き刺さる何かを感じて、慌てて後方に視線を飛ばす。

「何？ 誰かいるの？」

霊柩車の方角は、今は銀杏いちようの木が死角になって窺えない。どうやら、人の視線ではなかったようだ。

「気のせいだね。霊じゃ……あるまいし」

いつも美穹乃の不安を紛らしてくれる自己暗示は、今回ばかりはちゃんと機能しなかった……。



太陽の笑顔は雲に遮蔽され、辺りは暗くなる。ややあって、美穹乃が誇る栗色の髪が風にそよいだ。

（喩樹のお姉さんに挨拶しなきゃ）

思い立った美穹乃は、銀杏ぎんなんの縄張り横断して霊柩車の待機する周辺に近づくことにした。重量感のある空気は、我慢するしかない。

喩樹の姉とは面識がある。もともと、喩樹とは幼馴染みなのだから、あたりまえだ。

周囲の空気に溶け込みつつある美穹乃は、記憶を頼りに捜している。

「旭川さん？」

電話で聴いた声がした。微妙に音質は異なってはいたが、雰囲気はドンピシャだ。

「えっと、お姉さん……じゃなくて、早乙女さおとめ榎さん。ですよね？」

社交辞令で愛想笑いしつつ、美穹乃は尋ね返した。

「下の名前、覚えていてくれたのね。ありがとう」

頭でも下げそうな勢いで、榎は感激を示した。落ち着いた風采とは違ってかわって、言動は外れたところがあるようだ。

「いや、はは……、人の名前を忘れたりなんかしませんよ。あたし、記憶力は自慢ですから」

（携帯のメモリー調べるまで存在すら忘れてたけど……、まあいいか）

「葬儀はほとんど済んじゃったけど」

帰り際の団体に肩を接触した榎は言葉を切り、「すみません」とお辞儀で詫びながら、美穹乃の隣に肩を並べた。

「線香ならまだ間に合うかも。する？」

脇の美穹乃へ顔を向けて、榎は提案する。

長身の部類に入る榎を上目遣いで見据え、

「そりゃーできれば、是非、します。そのために来たんですから」

美穹乃は応じた。

「そう……じゃあ、いらっしやい」

感情が読み取れない声色で言ったのち、榎は本堂に向かって歩き出す。

（事故の詳細とか、誰かから聞きたかったんだけど……）

首をきよるきよるさせて辺りを洞察しながら、榎の跡をつける美穹乃。

（不謹慎だよね。あたしったら）

内意を払った美穹乃は、大人しく榎の背を追うことにした。  
不意に気になって、さっき何かを感じた位置を顧みるも

あるのは、代わり映えもなくそこに居座る銀杏の木だけ。小鳥すらいない。

（なあゝんだ、やっぱ気のせいじゃん）

つづく

## 第一話 告げる風（後書き）

無知で浅学ながら、どうにかです。

もう自棄<sup>ヤケ</sup>です。

京都の地理的な関係性は半ば仮想です。

それと、話は違いますが、小説から離れた文章での慇懃無礼な敬語は、相手が人生の先輩だと仮定しているからです。従来、小説は大人の嗜好品と定義されていきましたから（百年も昔ですが）。でも、昨今の小説は意外と層が割れてないんですね。考えを改めます。されど敬語は放棄しませんので、悪しからず。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6191c/>

---

アマツ風に吹かれて

2010年10月12日05時36分発行